



The View of Making Light of the Gaya History Revisited

金 泰 植

はじめに

- ①加耶の歴史
- ②加耶軽視の論理
- ③神功紀四十九年条の問題
- ④三国時代論の問題
- ⑤加耶政治体の水準

むすび



加耶を含む「四国時代」という概念は、古代韓半島史の正確な理解のための中心軸となる。そして本稿では加耶史をその他の三国である高句麗、百済、新羅との関係のなかで簡単にまとめた。また加耶史を軽視する諸般論理を批判した。

加耶の形成は、前2世紀末から前1世紀初頭にかけて、韓半島北西部から鉄器と灰白色土器を基盤とする発達した文化が、慶尚南道各地に流入することを契機として始まった。2世紀中頃までは小国が形成され、3世紀初めには金海の狗邪国を中心としたゆるやかな連盟体を結成した。3世紀後半以降、狗邪国はより緊密な結び付きをもつ連盟の中心的な存在として台頭した。

新羅は4世紀後半以降、高句麗の影響を受けて成長し、加耶は百済との連携を通じて倭との中継貿易をおこなった。しかし、高句麗と百済の権力争いは下位勢力である新羅と加耶へ影響を与え、金海の駕洛国を中心として構成されていた前期加耶連盟は高句麗の直接的な軍事介入により400年に解体された。

5世紀後半、加耶連盟は高麗の大加耶を中心として復興され、小白山脈の西側にある全羅南北道の東方地域まで包括しながら発展した。後期加耶連盟は、連盟体の形成時期が遅かったにもかかわらず、かなり円滑に権力の集中化を成し遂げ、6世紀初には初期古代国家として成長した。しかし結局6世紀中頃になると、加耶連盟は新羅により滅亡した。

こうして、韓半島の古代の大部分において、高句麗と百済の二強国と、新羅と加耶の二弱国が絡み合いつつ力の均衡をはかる過程が展開する。さらに、前期加耶連盟が解体した5世紀初めには、数多くの移住民が日本列島に渡り、製鉄技術と陶質土器である須恵器の製法を日本人に伝授した。日本の古代文明はそこから始まった。